MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．１１．４　発行元
第 526 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

仁木悦子『ベスト表』(再掲)

仁木悦子の『ベスト表』を再び取り上げる。本格謎解きのトリックを使った作品がある一方で、ハードボイルド仕立ての作品も書いた仁木悦子。私の好きな作家の一人なので是非多くの人に読んでほしいと思う。

最初の江戸川乱歩賞受賞作家

仁木悦子は最初の江戸川乱歩賞受賞作家である。江戸川乱歩賞が新人作家の作品を募集する方向に転換した時の最初の回(第三回)の受賞者。作品は『猫は知っていた』。

以前の『仁木悦子の代表作』の号では『冷えきった街』『殺人配線図』『みずほ荘殺人事件』の三冊を取り上げた。今回はその『猫は知っていた』と短編集の『緋の記憶』を紹介することにした。仁木作品はどれをとっても水準以上の出来であり、読者を楽しませてくれるだろう。

ただ、最近は私の本棚以外では目にする機会ががくんと減ってしまった。ネット上を見るとそれほど高値にはなっていないから、古書市場にはたくさん流通しているのだろう。驚愕するようなトリックではないものの、上質の「本格もの」を味わうことができるはずなので、多くの人にお薦めしたい本である。

《仁木悦子作品のベスト表》

1．冷えきった街
2．林の中の家
3．殺人配線図
4．灯らない窓
5．青白い季節
6．二つの陰画
7．枯葉色の街で
8．黒いリボン
9．みずほ荘殺人事件(短)
10．猫は知っていた
11．凶運の手紙
12．刺のある樹
13．夢魔の爪(短)
14．死の花の咲く家(短)
15．赤い猫(短)
16．陽の翳る街
17．暗い日曜日(短)
18．三日間の悪夢(短)
19．銅の魚(短)
20．緋の記憶(短)
21．夏の終る日(短)
22．赤と白の賭け(短)
23．一匹や二匹(短)
24．聖い夜の中で(短)
25．青い風景画(短)

現在、仁木悦子の作品を新刊書店で買うことはなかなか難しい。図書館には何冊かはあるだろう。私の手元にあるのは、立風書房版の『仁木悦子長編推理小説全集』や同じく立風書房から出ている短編集等である。昭和五十年代に角川文庫から短編集がまとまって発刊されたこともあった。

『猫は知っていた』　１９５７年の作。第三回江戸川乱歩賞受賞作品。仁木悦子ミステリの中で一番名前が知られていて、なおかつ図書館にもありそうなのが本書。私は講談社文庫で読んだ記憶なのだが、今手元に残してあるのは立風書房版の『仁木悦子長編推理小説全集』の第一巻。仁木兄妹探偵の作品ということになる。

プロローグ。仁木雄太郎と悦子の兄妹が箱崎医院の二階に部屋を借りて引っ越してくる場面から始まる。作中の悦子は音楽大学の学生で、雄太郎は植物学を専攻する学生となっている。医院に着くと足元に小さな黒猫・チミがすりよってくる。そして、建物の図面入り。こういうところが「本格もの」らしくてよい。この医院を舞台に連続殺人が起きていく。怪しげな電話のこと、秘密の抜け穴が…、そして毒蛇の毒が塗られたナイフ…と謎だらけの事件が展開していく。素人探偵として好奇心にあふれた仁木兄妹は独自に推理を組み立てていく。いくつかのトリックが工夫されていて乱歩賞に相応しい仕上がりになっている。

『緋の記憶』　１９８１年立風書房。『小説推理』や『小説宝石』などに掲載された私立探偵・三影潤シリーズを集めた短編集。立風書房では本書にあわせて『赤い猫』『一匹や二匹』『青い風景画』などの短編集を出している。いずれも当時の雑誌に掲載された作品を集めたものである。三影の物語はハードボイルド色は強くない。依頼された日常のあれこれの件を淡々と捜査していく様子が描かれている。

第一話の『暗緑の時代』では、三影がふらりと入った美術展での出来事。「阿部公平遺作展」の会場で小品を盗もうとした男を追いかける。取り逃がしてしまったが、翌日故人の妻が訪ねてきて、なぜその絵を盗もうとしたのか調べてほしいと依頼される。「暗緑」の色が特徴的な絵。聞くと故人は昨年海で事故死したらしい。調べることで事件の裏側に隠された人間関係が明らかになって来るという話。第二話の表題作『緋の記憶』は女子学生からの相談。最近気持ちの悪い夢を見るという。それは、小さな子どもの頃に母親に引きずられる夢、洋風の屋敷の庭で男の子と遊んでいる夢、そして赤い花が敷き詰められたところに母親らしき人物が倒れている夢なのだという。それなら精神分析医に相談した方がよいのでは…とアドバイスしたところ、四歳の時に亡くなった母親の事件の真相を突き止めてくれと告げられた。三影が捜査を開始すると…。